ユネスコスクール活動事例集

第 9 集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組		2
ユネスコスクール活動事例①	**豊橋市立鷹丘小学校**	4
ユネスコスクール活動事例②	**豊橋市立下条小学校**	6
ユネスコスクール活動事例③	**豊橋市立東部中学校**	8
ユネスコスクール活動事例④	**豊橋市立南稜中学校**	10
ユネスコスクール活動事例⑤	**名古屋大学教育学部附属中・高等学校**	12
ユネスコスクール活動事例⑥	**愛知県立愛知商業高等学校**	14
ユネスコスクール活動事例⑦	**愛知県立豊田東高等学校**	16
ユネスコスクール活動事例⑧	**名古屋市立北高等学校**	18
ユネスコスクール活動事例⑨	**名古屋国際中学校・高等学校**	20
ユネスコスクール活動事例⑩	**中部大学第一高等学校**	22
愛知県ユネスコスクール交流会		24

はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、1953（昭和28）年に創設された、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育、といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。世界182か国で約11,500校のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,120校を数えます。愛知県では、2014（平成26）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中・キャンディデートを含め166校が活動しており、国内最大規模となっています。

昨今、様々な場面でSDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）について目にする機会が増えました。SDGsは、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲットにより構成されています。ESDは、このうち、目標４「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のうちターゲット4.7に位置付けられています。それに加えてESDは、全てのSDGsの達成に貢献するものとして重要視されています。新学習指導要領の前文及び総則においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科指導においてもESDの視点での授業改善が求められるなど、コロナ禍で世の中の先行きが不透明な中、ESDの目標でもある自律心、判断力などの人間性を育むことや、他人との関係性を尊重できる児童・生徒を育むことが求められています。

愛知県教育委員会では、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業及び加盟支援事業を行っています。本年度も、児童・生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」を開催しました。また、ユネスコスクールへの教員研修等への講師派遣、ESDの重要性を理解・実践できる教職員の育成を目指した管理職・ESD実践担当者等対象の研修会をオンライン、あるいはオンラインを併用したハイブリッド型で実施をしました。

本事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成にあたり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

2022（令和４）年３月

愛知県教育委員会

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組

LEAVE NO ONE BEHIND 誰一人取り残さない

SDGsの成り立ち

SDGsができる前にMDGs（Millennium development Goals：ミレニアム開発目標）という前身があるのはご存知でしょうか。2000年９月に、147の国家元首を含む189か国の加盟国代表が、21世紀の国際社会の目標として、より安全で豊かな世界づくりへの協力を約束する「国連ミレニアム宣言」を採択しました。この宣言と1990年代に開催された主要な国際会議やサミットでの開発目標を一つにしたものが「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）」です。MDGsは国際社会の支援を必要とする課題に対して2015年までに達成するという期限付きの８つの目標、21のターゲット、60の指標を掲げていました。

1 極度の貧困と飢餓の撲滅
2 普遍的な初等教育の達成
3 ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
4 幼児死亡率の引き下げ
5 妊産婦の健康状態の改善
6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疫病の蔓延防止
7 環境の持続可能性の確保
8 開発のためのグローバル・パートナーシップの構築

SDGsとは？

SDGsはMDGsに代わる新たな行動計画として定められ、MDGsで未達成だった課題や地球規模で向き合わなければならない新たな課題について、先進国と途上国が共に達成すべき目標とし、169のターゲットとともに構成されています。

誰一人取り残さないようにするために、世界で取り組む17の共通の目標

1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー[※1]平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさを守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップ[※2]で目標を達成しよう

※1 ジェンダーとは、社会的・文化的な性別のこと。
※2 パートナーシップとは、みんなで力を合わせること。

Sustainable（持続可能な）Development（開発）Goals（目標）

SDGsとは、2015年に国連加盟国によって総会決議された持続可能な17の開発目標のこと。2030年までにこれらの目標の達成を目指しています。

私たちの住むまち

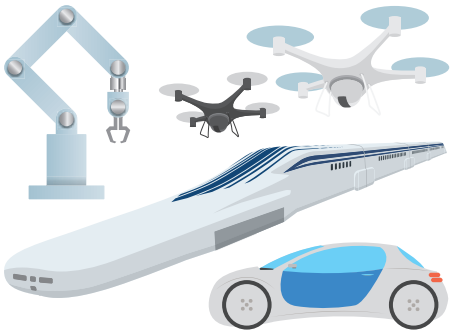
愛知県SDGs未来都市計画について

愛知県が2030年までにさらに住みやすいまちになるための取組

経済・社会・環境の３つの調和がとれた県を目指す

愛知県は、2019年７月に内閣府から、SDGsの達成に向けた優れた取組を実施する「SDGs未来都市」に選ばれました。経済・社会・環境をめぐる幅広い課題に一体的に取り組みながら、すべての県民のみなさんと一緒に持続可能な社会を目指しています。

経済分野



〈SDGsにつながる取組〉

- 近未来技術等の社会実装の推進
- スタートアップ※と既存企業の連携によるイノベーションの創出
- 自動車分野における新事業展開支援
- 「モノづくり×AI・IoT※」をテーマとした大学対抗ハッカソン※の開催

世界をリードする日本一の産業の革新・創造拠点

環境にやさしい未来の自動車や飛行機、ロボットなどの開発に取り組み、世の中を変える新しい技術を持った企業がどんどんと生まれるような地域を実現します。

〈※用語解説〉• スタートアップ：急成長が期待される設立間もない企業のこと　• IoT：さまざまなモノがインターネットにつながること
• ハッカソン：パソコンを活用して新たな製品・サービスの開発を競い合うイベント

社会分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 若者の活躍促進
- 女性の活躍促進
- 高齢者の活躍促進
- 障害者の活躍促進
- 外国人の活躍促進

人が輝き、女性や高齢者、障害のある人など、すべての人が活躍する愛知

人口の減少や、高齢者の増加がますます進んでいく中、年齢や性別、障害の有無、国籍などに関わらず、どのような人でも活躍でき、全員で支え合う社会を実現します。

環境分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 「あいち地球温暖化防止戦略2030」の推進
- EV・PHV・FCV※の普及促進
- 循環型社会に向けた取組
- 自然との共生に向けた取組
- 行動する「人づくり」

県民みんなで未来へつなぐ「環境首都あいち」

県民のみなさんが、あらゆる場面で環境のことを考えた行動をすることで、安全で快適な暮らしを守り、環境と経済がうまく共存できる地域を実現します。

〈※用語解説〉• EV・PHV・FCV：電気自動車・プラグインハイブリッド車・燃料電池自動車の略

※各分野の目標は愛知県が独自に選定したものです。

環　境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防　災　エネルギー　その他

豊橋市立鷹丘小学校

創　立：1978年
住　所：〒440-0013 豊橋市西小鷹野町三丁目7-1
連絡先：TEL 0532-63-2633　FAX 0532-65-1205
学級数：28　児童数：760人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/takaoka-e/

みんな笑顔に、大好き鷹丘～共に生きる～

はじめに

様々な視点から「ふるさと鷹丘」をよりよい場所にしていくために考える学習「たかおか学習」。総合的な学習の時間や生活科を中心に自然、国際理解、障害などの面から鷹丘の現状を捉え、みんなが共生していくために様々な実践を行ってきた。子供からお年寄り、様々な国にルーツを持つ人など、みんなが笑顔で暮らせる鷹丘校区にしていき、「ふるさと鷹丘」のために貢献しようとする気持ちを高められるようにしたいと考え、本主題を設定した。

実践内容❶「わたしたちの朝倉川」

ねらい：鷹丘校区にある朝倉川をきれいに保っていくために、できることを考え実践する。

子供たちは、朝倉川に行きたくさんの魚や昆虫がいることを知ったが、同時に川沿いにゴミが多いことにも気付いた。自分たちが住む鷹丘校区の生態系が危機的な状況にあることを知り、それらを守るために何ができるのかを話し合った。様々な活動の中から、ゴミのポイ捨てを未然に防ぐためのポスター制作と、生き物たちが朝倉川で住みやすくするための清掃活動を行いたいと考えた。自分たちが大人になっても、他の人達がポスターを見て、朝倉川を大切にしていきたいという思いを持ってほしいと願い、ポスターを完成させた。清掃活動は、自分たちの手で鷹丘の自然を守りたいという強い気持ちを持って取り組んだ。子供たちは、時間いっぱい仲間と協力しながら清掃を続け、多くのゴミを拾うことができた。拾ってもなおゴミが残っている箇所もあったので、子供たち以外の人にも朝倉川をきれいにしていってほしいという願いを改めて持った。来年度以降は、地域の方にも自分たちと同じような意識を持って朝倉川を大切にしてもらうために看板を作ったり、直接呼びかけたりするなどの活動を実践していきたい。

朝倉川でのゴミ拾いの様子

成　果

人も生き物も住みやすい鷹丘校区にしていきたいという思いを持つことができた。多くの人に現状を知ってもらえることで、一人一人の意識が変わっていき、鷹丘校区がきれいになっていく様子を見ることができた。来年度以降も引き続き行っていくことが大切。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「共に生きる～障害～」

ねらい：鷹丘校区で共生を進めていくために、障害について考えたり、調べたりして理解を深める。

障害のある人との共生を進めていく上で、子供は、障害があることで、どのようなことが苦手で、どのようなことが得意なのかを理解していなかったので、まずはインターネットで調べたり、特別支援学級に在籍する児童にアンケートを取ったりした。調べながら理解を深めていく中で、自分たちにできることは何かという疑問を持ち、話し合いを進めた。そして一緒に遊ぶ計画を立てた。そこから、ただ一緒に活動するのではなく、相手の立場になって自分ができることを考える大切さに気付いた。

様々な道具を使った障害者体験

成 果

共生を進めていくためには、まず相手のことを知ることが大切。自分たちが普通に行っていることも、障害があると大変なことが多いということを体感することができた。困っている人を見たら、すぐに助けたい。

実践内容❸
「共に生きる～多文化共生～」

ねらい：鷹丘校区で外国人も笑顔で暮らせるようにするために、話を聞くことで理解を深める。

外国の人と共生をしていく上で、鷹丘校区に住む外国人がどのように感じているのか聞いてみたいと考えた。そこで、鷹丘校区在住で通訳として働いている方にお話を伺う機会を設定した。その方は小学校５年生で日本に初めて来て、日本語が全く分からない状態で生活することがとても大変であることを話してくださった。先生の指示も分からなければ、友達とのコミュニケーションも上手く取れないことが苦痛だったと言っていた。しかし、言葉は分からないけれど積極的に話しかけてくれる友達の存在が心の支えになったと言っていた。講話を聞いて、子供たちは、自分たちの想像以上に言葉の壁が大きいことや、言葉が分からなくてもジェスチャーなどで積極的に関わることの大切さを学んだ。

校区内に住む外国籍の方の講話

成 果

自分から積極的に話をかけていくことが大切である。その子にとっての心の支えになれるようにしていきたい。そうしていくために、外国籍の人達がどのようなことで困っているのかを知り、他の人にも知ってもらえるようにポスターなどで広げていきたい。

おわりに

今回の実践では鷹丘校区の特色を生かし、自然や人を大切にし、みんなが笑顔で暮らしていく工夫を一人一人が考えた。今後の鷹丘校区のために大切にしていきたいと考えたことを２つ挙げたい。

①相手のことを知り、自分たちが知ったことを周りの人達にも広げていくこと。

②これからも一人一人が「ふるさと鷹丘」のためにできることを考え実行していくこと。

これらを踏まえ、みんなが住み続けられるまちづくりに励んでいきたい。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

豊橋市立下条小学校

創　立：1872年
住　所：〒440-0002 豊橋市下条東町字西浦41
連絡先：TEL 0532-88-2350　FAX 0532-87-1011
学級数：8　児童数：55人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/gejou-e/

校区のよさを知り、「下条」を愛する子の育成

はじめに

下条校区は、豊橋駅より北に5kmほどのところにあり、一級河川の豊川を境に、豊川市に隣接している。昔から米がたくさんとれた裕福な土地柄で、各町内に神社や寺があり、自然豊かな地域である。また、本校は各学年単学級の小規模校であり、全児童を全職員で見守る温かな雰囲気である。このような環境の中、家庭や地域の支援と協働により、校区の「もの・ひと・こと」に着目しながら農業体験活動を重視した教育活動を実践している。

実践内容❶
「畑の恵み、いただきます」

ねらい：作物の栽培体験をはじめとする多様な活動を通して、問題を解決する力や豊かな社会性を育む。

下条小学校には、敷地内にある畑（内畑）と、地域の方に借りている畑（外畑）がある。内畑では、夏と冬の2回、自分で決めた野菜を種や苗から育てている。野菜を育てるにあたって、自分たちでいつ間引き、肥料をやり、収穫するのかなどを調べたり、害虫対策の方法を本で見て学んだりし、実践している。葉が虫に食われたり、枯れてしまったりすることもあるが、対策を考えて対応し、後の成功体験へとつなげている。

また、毎年7月には、内畑で各自が育てた夏野菜と、外畑で育てたジャガイモ、タマネギ、枝豆などを使用した弁当を持ち寄る「下条産弁当の日」を設定している。弁当は、家の人がすべて作るのではなく、発達段階に合わせてめあてを設定し、子供でもできることは自分で取り組むようにしている。中には、3年間オクラを育て続けて研究し、オクラの食感や風味を生かした料理を入れた「オクラ特製弁当」を作った子供もいる。自分の手で育て、味わう「下条産」の野菜は、どの子にとっても最高においしいと感じることができ、野菜作りの楽しさや食への感謝の気持ちを高めることができた。

夏野菜の定植をする子供たち

成　果

体験を重視した問題解決学習は、子供たち一人一人に充実感や満足感をもたせ、自信を持って粘り強く課題に取り組む力を高めることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「先人の知恵から学ぶ霞提の秘密」

ねらい：校区に広がる水田について学び、地域の歩んできた歴史について考える。

下条校区の特徴の一つでもある田園風景。昔から米作りが盛んだった理由について学習した。学ぶ中で、理由の一つに「霞提」が挙げられることが分かった。霞提とは、わざと堤防が切れた状態になっているところのことである。霞提があることで、洪水時に霞提地区内に洪水があふれ、上下流の水位上昇が小さくなることにより、下流部の被害が軽減されてきた。そのため、多くの人命が救われてきたことが分かった。また、地域の方に聞いたところ、洪水時、山の栄養をたっぷり含んだ水が霞提地区内に流れ込むことで、肥沃な土地になり、たくさんの米がとれたことが分かった。学習のまとめの中で、現在の豊かな生活には、昔の人々の知恵が大きく関わっていることが分かった。

地域の方から話を聞く子供たち

成 果　災害として捉えられる洪水をうまく利用した土地利用によって、現在の豊かな生活があることを理解し、下条をつくってきた先人たちへ感謝の気持ちを高めることができた。

実践内容❸
「下条の特産！自慢の菊の葉」

ねらい：下条に生まれた新しい農業に着目し、下条の未来について考える。

下条校区は、初めて菊の葉が栽培された全国で唯一の生産地で、３年生が、菊の葉農家の仕事について学習した。菊の葉は、料亭でお刺身の添え物に使われたり、天ぷらにして食べたりするが、花が咲いてしまったら収穫できないので、夜もLEDライトをつけて昼間だと思わせ、花を咲かせないようにしていることが分かった。また、菊の葉は寒さに弱く、虫に食べられたり病気にかかったりすることがあり、さらに今は、コロナ禍で出荷量が減っているため、廃棄が続いていることも分かった。そのため、子供たちは、家庭用としても取り入れてもらえるような新しいレシピを考え、下条に生まれた新しい農業を応援していきたいという思いを持つことができた。

菊の葉について話を聞く子供たち

成 果　下条で生まれた「菊の葉」の学習を通して、農家の方の苦労や喜びを知るとともに、より多くの人たちに下条の「菊の葉」を広めるための工夫について考え、行動することができた。

おわりに

これまであたりまえだと思っていた下条の緑豊かな自然。これらの学習を通して、そこには、脈々と受け継がれてきた知恵や様々な思いがあることに、子供たちは気付くことができた。そして、これこそが「ふるさと下条」のよさであり、すばらしさであることを学んだ。これからも校区とともに生き、「下条大好き!」と思える子供たちを育てていくために、校区の「もの・ひと・こと」に重点を置いた活動を継続していきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊橋市立東部中学校

創　立：1982年
住　所：〒440-0834 豊橋市飯村北四丁目1-2
連絡先：TEL 0532-63-1355　FAX 0532-65-1203
学級数：24　生徒数：769人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/toubu-j/

校区と連携した持続可能な取組を目ざして

はじめに

東部中校区は、中央を国道１号線が走り、東三河環状線などの幹線道路も通っている。外国人の居住も多い地域で、日本語指導を必要とする生徒が多く、共生関係を築いている。市内で最も生徒数の多い大規模校である。本校では、「生徒主体の東部中」を合い言葉に教育活動に取り組んでおり、「当たり前のことを当たり前にすること」「気付き、考え、行動すること」が生徒・職員に浸透し、落ち着いた学校生活を送っている。生徒一人一人を大切にし、将来の夢や希望を持たせ、安心安全で楽しく活気のある学校づくりをしている。

実践内容❶
「TNP（東部校区ナンバーワンプロジェクト）会議」

ねらい：校区について考え、自分の学校や校区をよりよくするための活動を実践することができる。

東部中学校区には、３つの小学校（飯村小、岩西小、つつじが丘小）がある。そして、PTAである保護者、青少年健全育成会、豊橋シニアライオンズクラブの代表者と連携し、東部中学校区を盛り上げていくための活動を行っている。歴史をさかのぼると、2001年に行われたあいさつサミットから形を変えて続いている。

第２回TNP会議

TNP会議は、年３回行われる。第１回は５月。活動予定の発表と合同で取り組む活動の計画をする。第２回は８月。各校の取組の中間報告と、合同での活動を実行する。第３回は２月。活動のまとめと発表を行う。TNP会議では、各校が混合のグループに分かれて、中学生が司会進行をしながら、テーマに沿って話し合いを進めていく。グループで出た意見を全体で共有する。そして、合同で行う活動内容の計画を立てたり、学校や校区に掲示するポスターを作成したりする。

成　果

学校の代表として会議に参加することで、自分が知らない校区の現状を知り、母校や校区をよりよくしようと考えるようになった。企画や運営、実践を通して、地域からも認められ、自信を持って行動できるようになった。そして、地域の方など大人の意見に触れ、多面的な見方や考え方を持つことができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「地域を明るくするあいさつ運動」

ねらい：朝の爽やかなあいさつを行い、地域に明るいあいさつの輪を広げる。

委員会活動とも連携して、朝のあいさつ運動を行っている。PTAである保護者や、青少年健全育成会の方にも参加していただいて一緒に行った。あいさつ運動のポスターを作ったり、あいさつ運動のオリジナル曲を流したりしながら盛り上げている。今年度は、コロナ禍ということで、各学校での活動となった。例年は、校区合同のあいさつ運動も行っていて、中学生が小学校に出向いて朝のあいさつ運動を一緒に行っている。

響け挨拶 広がれ絆

成 果　初め、あいさつ運動に参加した生徒は、恥ずかしそうに挨拶をしていた。しかし、友達から明るい挨拶を返されたり、地域の方から丁寧に挨拶をいただいたりすることで、段々と元気な挨拶を交わすことができた。

実践内容❸
「フルフルフラワープロジェクト」

ねらい：花を植えてきれいな町づくりを目ざす。

花があると、その環境が明るくなり、花を見ると、人は気持ちが和らいだり、笑顔になったりする。学校の花壇に花を植えて増やすだけでなく、地域や地域の施設の方にも喜んでもらうために、花を植えたプランターを介護施設に寄贈したり、花の苗を施設の庭に植えたりと地域へ出かける。

花を贈る 愛を贈る

成 果　自分の手で花の苗を植えることを通して、介護施設の方に感謝の言葉をいただいたり、地域の方に声をかけていただいたりした。感謝の言葉に触れることで、自分たちの活動がきれいな町づくりに役立っているという成就感を感じることができた。

おわりに

新型コロナウイルスの影響で、２年間TNP会議が開催できていない。そのため、各学校でできる活動を行っている。このことで、TNP会議を知っている人や経験した人が少なくなっている。20年続く伝統ある活動をもっとたくさんの人に知ってもらいたいと考え、東部中ではTNP活動をパワーポイントで全校生徒に紹介し、小学校にも呼び掛けてTNP活動のキャラクターを募集した。

また、TNP活動は、その年その年で新しい企画を考えることも多く、一時的な活動になることもあった。この先、活動メンバーが変わっても持続的に行える活動を考えたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊橋市立南稜中学校

創　立：1947年
住　所：〒441-8134 豊橋市植田町的場50
連絡先：TEL 0532-25-1318　FAX 0532-44-3061
学級数：24　生徒数：707人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/nanryou-j/

地域とかかわり、未来に思いをつなぐESD

はじめに

本校区は豊橋市の南西部に位置し、住宅街や大型ショッピングセンター、工場、畑など、豊かな自然の中でたくさんの人が生活している校区である。2018年度より始まった地域貢献ボランティアでは、吹奏楽部の地域祭礼での出前演奏やイベントの準備など、地域からの依頼を受け、中学生が休日に取り組んでいる。また、梅田川を題材とし、中学校３年間を見通した総合学習の年間指導計画やESDカレンダーの作成、大崎小学校との小中連携を行うことで、教科と領域、授業と行事、小学校と中学校のつながりを意識したESD活動を行っている。

実践内容❶
「地域貢献ボランティア・梅田川フォーラム」

ねらい：持続可能な社会の実現のため、地域の一員として行動する。

地域貢献ボランティアでは、生徒会の中に「ボランティアセンター」を設立し、校区からの依頼をよりよく実現するために、生徒の手で選定・改案している。これまでの実績として、吹奏楽部の地域祭礼での出前演奏や小学生の夏休み宿題サポート、桜まつりや敬老祝賀会の会場準備などがある。昨年度より、コロナウイルスの感染予防のため、地域での活動が難しい状況が続いている。そんな中、生徒会役員が「校内でできることに取り組もう」と声をあげ、草取りやペンキ塗りなどみんなが過ごしやすい学校づくりのために多くの生徒が自主的なボランティアに参加している。梅田川フォーラムでは、これまで地域の有志の手で行われていた梅田川の環境保全活動を引き継ぎ、ごみ拾いや水質調査を行っている。2021年８月のクリーン作戦では、中学生、小学生、保護者、自治会関係者総勢200名が参加し、550kgのごみを回収した。

これらの２種類のボランティアは豊橋ユネスコ協会が配付するESDパスポートに各自で記録し、15・30ボラン達成者を表彰している。これまでの３年間で、30ボラン達成者（認定証）は７名、15ボラン達成者（奨励賞）は82名にのぼる。ボランティアに参加した生徒からは「ありがとうと言われてうれしかった」「ボランティアって楽しい」という声が聞かれ、回を重ねるごとにボランティア参加者が増えている。

草取りボランティアの様子

成　果

気軽に参加できるボランティアが校内に定着し、生徒の勤労・奉仕の心を育てることができた。地域の人からの感謝の言葉はもちろん、活動後の達成感・充実感から、ボランティアのよさを多くの生徒が実感し、持続可能な社会の実現に向けて、地域の一員として活躍する生徒を増やすことができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう | 2 飢餓をゼロに | 3 すべての人に健康と福祉を | 4 質の高い教育をみんなに | 5 ジェンダー平等を実現しよう | 6 安全な水とトイレを世界中に | 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「梅田川を題材とした３年間の総合的な学習の時間」

ねらい：身近な環境問題を自分の問題としてとらえ、よりよく解決していく生徒の育成。

鉄炭団子を作る様子

学校から徒歩10分の位置にある梅田川は、カニや巻貝など貴重な在来種がたくさん生息している一方で、においが臭かったり、ごみがたくさん落ちていたりするなど解決すべき課題も多い。地域のお年寄りに「60年前は海水浴場があって子供たちは泳いでいた」という話を聞き、生物のためにも、自分たちの未来のためにも梅田川をきれいにしていかなければならないという思いから、３年間の総合的な学習の時間は始まる。

１年生では、川がどれぐらい汚れているのか、どうして汚れてしまったのかについて、図書資料や現地調査、市環境政策課の出前授業などを通して、個々の課題について追究を深めていった。パックテストによる水質調査や捨てられているごみの種類と量を調べることで、梅田川の現状を客観的に捉えることができた。１年間の調査活動を壁新聞にまとめ、２年生に伝える活動を通して、梅田川をきれいにしたいという思いをさらに高めた。そして、自分たちに何ができるか、その具体的な方法について話し合い、２年生につなげることになった。

２年生では、１年生での学びを土台に、個人の追究テーマごとにクラスを解体し、同じテーマについて学ぶ「学年総合」で授業を実施した。上流と下流の比較では、実際に複数個所で水質調査を行い、中流域（二川）の方がCODが高いことが分かり、その原因を追究した。河口部（大崎）干潟での生物調査では、大崎小４年生と合同調査を行った。自然史博物館学芸員の協力を得て、外来種が増えてきていることを知った。12月に大崎小とのオンライン交流「梅田川サミット」を実施し、１年間の学びを発表しあい、ともに梅田川を守っていくことを約束した。年度末、梅田川のためにできることを４つにしぼり、３年生につなげることになった。

３年生では、２年生のときに考えた、梅田川をきれいにしていくための４つの作戦を実行に移した。企業や高校と連携した鉄炭団子による水質改善実験では、衣装ケースを使ったミニ梅田川や植田小観察池での検証実験の結果、水質改善に効果が見られることを確認できた。小学生や地域住民と一緒に行う梅田川クリーン作戦では、中学生と地域住民が協力し、みんなで自然を守っていこうという意識が向上した。梅田川の現状を多くの人に知ってもらうための情報発信では、駅や市民館へのポスター掲示、すごろくやPR動画の作成、ユネスコ交流会での発表を行った。そして、ESDに関する市内研究発表会を通して、本校の活動について広く発信することができた。

大崎小学校とのオンライン交流の様子

成 果

これらの活動を通して、多くの生徒が自分の活動に達成感を得るとともに、これからの生活でも持続可能な社会の実現のため、自分にできることを考え、実践しようという思いを高めることができた。また、企業や高校、近隣小学校、行政機関とのつながりを築き、生徒の学びを深めることができた。

おわりに

生徒のふり返りには、「テレビなどで汚れた川などを見るけど、それが身の回りにまで広がっていたことを知り、他人事で見ることなく、ちゃんと現実として受け入れられた」とあり、多くの生徒が梅田川の環境学習をきっかけに環境問題を自分事として捉え、その解決に向けて動き出していることが分かる。今後の課題としては、梅田川を題材とした学習が継続的に行われるよう、授業案や水質調査の結果を蓄積するとともに、2023年度より始まる小中一貫教育に向け、中学校区すべての小学校との連携を深め、同一歩調でESDをすすめていきたい。

環境 | **国際理解** | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

創　立：1947年
住　所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
連絡先：TEL 052-789-2680　FAX 052-789-2696
学級数：15（中学6 高校9）　生徒数：600人（中学240人 高校360人）
H　P：https://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp

コロナ禍だからできるオンライン国際交流

はじめに

本校は2010年にユネスコスクールの仲間入りをし、今年度で11年目を迎える。コロナ以前は、生徒たちが互いの国を行き来し、直接その文化、風習、習慣に直接接することができていた。しかしながら長引くコロナ禍の影響で国外はおろか国内での移動も大きく制限されている。そのような状況下でオンラインを活用した交流の成果が徐々に生まれて来ている。オンラインでは、参加生徒は無限に広がる。オンラインのデメリットも大きいが、その中でできる限りの取組を実施した。2021年度に実施した実践からいくつかを紹介する。

実践内容❶
「Global Classの開催 ～SDGsをテーマに成果発表会を開催～」

ねらい：SDGsの視点を広げ、世界へ目を向ける。

3か国（日本、モンゴル、米国）が参加したグローバルプログラムである。United Nation International School（米国）の生徒13名、新モンゴル高等学校（モンゴル）の生徒16名と本校の生徒12名が参加した総計41名からなる比較的大規模なプログラムである。一斉に集まる同期クラスや、発表グループごとに集まる非同期クラスを10月から2月にかけてオンラインで実施。時差の関係で、同期クラスの場合は、日本では22:30から（サマータイムは21:30から）始まる。3か国の高校生から構成される複数のグループごとに、SDGsのゴールから1つ選び研究と発表を行う。

3か国交流でのアイスブレーキング

非同期クラスの日程は、参加生徒たちがそれぞれ決める。交流方法は、Zoom、Google、メールと様々だが、インスタグラムをメインに活用しているグループが多い。それぞれのグループには、名古屋大学の学生が参加し、ファシリテータ役を務める。大学生も日本人学生だけでなく留学生も複数人参加し国際色豊かである。また、このSDGsをテーマにした発表会と平行して、カフカ「変身」、多和田葉子「犬婿入り」等を題材として3か国の高校生が議論をするクラスも行われている。このクラスはUNISのIBDPの授業の一環として行われているもので、米国、モンゴル、日本から合計5名の生徒が参加している。日本の文学作品を3か国の生徒が討論する取組はこれまでにあまりなく珍しい取組である。

成果

SDGsに関して自国の状況しか分からないことが多い。しかし米国、モンゴル、日本とそれぞれ特徴的なバックグラウンドを持つ3か国の生徒が集まり議論することでSDGsの視点が広がり、世界の状況を知ることで世界へ目を向けることができる。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「バークリー音楽大学へのオンライン留学」

ねらい：名門音楽大学との交流で世界観を広げる。

芸術系教育コンサルティング企業FOR ME NY がバークリー音楽大学と共同企画・実施する特別ワークショップ（２日間）に本校の中学１年生と２年生の合計13名オンライン参加をした。バークリー音楽大学の学生が創作した複数のミュージカル作品を鑑賞した。その後本校の中学生が日本のお正月を紹介し、自分たちで英訳した、瀧 廉太郎作曲による日本の唱歌「お正月」をメドレー方式で披露した。日米の生徒での意見交換やグループアクティビティを２時間楽しんだ。実施にあたり、事前学習として、FOR ME NYによるリーダーシップやコミュニケーション力の向上を図るためのワークショップがオンラインで開催された。参加した中学生は、英語でのコミュニケーションを楽しんだ。

オンライン交流の様子

成 果　ワークショップ実施は、時差の関係で夜遅くや、早朝になったことで、日頃は感じることにない時差を身をもって体感することができた。また、音楽を通して英語でコミュニケーションを行うことで、世界観を広げることにつながった。

実践内容❸
「英語の授業で行うオンライン国際交流」

ねらい：コロナ禍でも英語の授業が生きた英語につながるオンライン国際交流の実践。

英語の授業を活用して、米国の高校生やインドネシアの高校生とオンラインでの国際交流を高校１年生がクラス単位で実践した。９月に米国の高等学校３校、12月にインドネシアの高等学校２校とそれぞれ２時間ずつオンライン交流を行った。時差の関係で、米国の高校生は各家庭から個人単位で参加。インドネシアの高等学校は時差がなかったため、各学校から参加した。本校生徒も学校にあるタブレットを使用し、個人でZoomにアクセスをした。「カケハシ・プロジェクト」や「JENESYS・ASEAN」プロジェクト（ともにJICE主催）の一環として実施した。プログラム内では、それぞれの国の高校生が自国の紹介を行い、共通テーマに基づいてディスカッションをした。その後オンライン上でゲームを行い交流した。

学校紹介の様子

成 果　授業で英語を学んではいるが、学んだ英語を使用する機会が極端になくなっている中で、実際にオンライン上ではあるが英語を使ってコミュニケーションをとることで英語学習に対しての意義や目的を改めて生徒たちは認識することができた。

おわりに

未だ収束の兆しも見えないコロナ禍の中で、できることをできるだけたくさん実施しようと努力している。現在の高校３年生はコロナ出現の学年。２年生は入学時が長期休校で始まった学年。１年生はコロナ禍の中、試行錯誤しながら学校教育がなんとか継続されている学年。振り返ってみると、コロナ禍の中でも状況は刻々と新しいフェーズに入ってきていることが分かる。できることをできるだけたくさん実施することが、３年間しかない生徒たちの高校生活を、少しでも思い出のあるものにしてための私たちの仕事だと考えている。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

愛知県立愛知商業高等学校

創　立：1919年
住　所：〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
連絡先：TEL 052-935-3480　FAX 052-935-3470
学級数：21　生徒数：788人
H　P：https://aichi-ch.aichi-c.ed.jp/

ミツバチから広がる地域の輪

はじめに

学校周辺に広がる名古屋近代化の歴史遺産が数多く残るエリア「文化のみち」の地域活性化を目標に、2011年より「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」を立ち上げ、本校の校舎屋上で養蜂活動を行っている。ミツバチは環境汚染がある場所では生きられないという特性から、環境指標生物とも呼ばれている。しかし近年では、農薬被害による大量死や蜜源の減少など、ミツバチの生活環境が壊されつつあるのが現状。そこで、少しでも多くの方に地域環境や生物多様性に関心を持っていただけるよう、ミツバチを核に様々な活動を展開してきた。

実践内容❶
「東区スモールアクションプロジェクト」

ねらい：ミツバチの蜜源を増やすとともに、地域の方が心を安らげる癒しの場になる。

これまで発信してきた「身近な自然を大切にする」というアクションを私たち自身が実践することで、推進活動につなげたいと考え、東区役所が推進する「東区スモールアクションプロジェクト」に参加した。このプロジェクトは、区民一人ひとりが小さな行動を起こすことで東区をより住みやすい街にし、盛り上げていこうという取組。一昨年の10月、私たちは本校近隣にある東橦木公園の花壇にれんげを植え、「東区彩るれんげプロジェクト～ミツバチと笑顔の花を咲かせよう!～」を開始した。

プロジェクトを成功させるため、種まきや水やりを行い、花壇が目に止まりやすいよう、温かみのあるオリジナルプレートを手作りするなど、東区役所の地域力推進室や東土木事務所、東橦木公園愛護団体の皆様と協働で進めてきた。そして昨年の春、れんげが開花時期を迎え、花壇が鮮やかに彩られた。

また今年度はれんげに代わり、同じく蜜源植物であるコスモスを花壇に植え「気持ち咲かせる交差点～東区が色づくコスモス畑～」と題して、取組を継続している。今回は、ミツバチと花の関係性を伝える動画を作成し、この取組を多くの方に発信していく仕組みづくりを進めている。

東橦木公園の花壇に咲くれんげ

成　果

蜜を取りにくるミツバチの姿やれんげの写真撮影をされている方が見られたことから、地域の方とミツバチの憩いの場になったと考える。

これらの取組を通して、ミツバチだけでなく、私たちの活動拠点であり大きな支えとなっている東区のさらなる活性化につなげ、恩返しができたと思う。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「いただきますのむこうがわ」

ねらい：食という観点から、ミツバチの大切さや環境問題を自分事として捉えていただける。

絵本の読み聞かせの様子

ミツバチは、私たちが普段口にする食料の約３分の１の受粉を媒介しており、私たち人間の生活を大きく支えている。人間とミツバチの間には支えあいの関係があり、私たちが生活していくためにもミツバチとの共存が不可欠となっている。

発信媒体として感情移入ができ、楽しみながら自然と学べる「絵本」を選んだ。制作にあたって既存の絵本を研究し、試行錯誤を繰り返しながら物語やイラストの構成を考えた。絵本のタイトルは「いただきますのむこうがわ」とし、挿絵は下書きから色塗りまで部員で協力して仕上げた。現在名古屋市内21か所の図書館をはじめ、日進市の図書館にも置いていただいている。また、図書館やイベントにて読み聞かせを実施している。

成 果

図書館に来た小学生や親子に、生物の命の大切さやありがたさについて考えていただくきっかけを提供することができた。

作成した絵本が多くの方の心に響いたことがとても嬉しく、絵本を作成して良かったと大きなやりがいを感じることができた。

実践内容❸

「オンライン夏休み自由研究お助け隊！」

ねらい：小学生を対象にミツバチの生態や環境について伝え、環境問題への意識を高める。

イベントの様子

イベント当日は校舎屋上と部室の２か所からライブ中継を結び、リアルタイムで養蜂場見学を行った。また、はちみつが作られる工程を画像や動画で紹介しミツバチを観察して実際に絵を描いてもらった。参加型のイベントにすることで、楽しみながら学んでいただいた。

オンライン開催は初めての試みであり、苦労した点も多くあった。しかし、全国から気軽にイベントに参加できる点や、近寄って見学することが難しいミツバチや巣箱の中の様子を画面越しで見せられるなど、対面型イベントにはない強みを知ることができた。

今後もこのようなオンラインでの発信を行うことで、より多くの方にミツバチの大切さや生態系、ミツバチと人間のつながりを伝えていきたいと考えている。

成 果

はちみつなどの身近な題材からミツバチについて発信したことで、興味・関心を育てることができた。またイベントを通して、子供とともに参加した親世代にも生態系や生物の命の大切さ、ありがたさについて考えていただくきっかけになったと思う。

おわりに

今後は、ミツバチの大切さや環境について多くの方に伝え、withコロナの生活に適用しSNSやオンラインを活用した発信を積極的に行っていきたいと考える。また、地域の方との交流を増やし、地域の課題について一緒に解決していきたい。経験から得た学びをより発展させ、地域・企業・行政と協働し、世代や属性を超えた人的つながりを構築しながら、社会の課題を自分事としてとらえ、行動する未来を目指して、これからも挑戦を続けていく。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

愛知県立豊田東高等学校

創　立：1924年
住　所：〒471-0811 豊田市御立町11丁目1番地
連絡先：TEL 0565-80-1177　FAX 0565-80-5066
学級数：18　生徒数：710人
H　P：https://toyotahigashi-h.aichi-c.ed.jp/

人と人との交流を通した「夢の実現」

はじめに

環境教育、国際理解教育、地域連携教育を３つの柱として、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組んでいる。３つの柱を融合させ、人種、年齢、性別の違いを超えて幅広い人との交流を活発に行っている。将来「持続可能な社会」作りのための担い手となって地域社会に参加する態度や、問題を解決する力を持った生徒を育てることを目指しており、人と人とのつながりの中で、相手を理解し、自分の視野を広げ、自主的に行動する力やコミュニケーション能力の育成に力を注いでいる。

実践内容❶
「コロナ禍でもオンラインで国際交流」

ねらい：オーストラリア姉妹校とのオンライン交流事業を通して、異文化を理解する態度を養っている。

オーストラリアのメルボルンにあるパスコベール女子校との姉妹校提携は1993年に結ばれ、今年で29年目になる。隔年での受け入れ・訪問を行っていたが、新型コロナウイルスの影響を受け、今年度の受け入れ・訪問は中止となった。生徒は文通での交流を続けていたが、コロナ禍での郵便事情から例年のように活発な国際交流を行うことが難しかった。そこで、文通交流に加えてオンラインでの交流を企画した。文通交流に参加している本校生徒56名がパスコベール女子校で日本語クラスを受講している文通相手とWeb会議ツールのZoomを利用して交流を行った。「オンラインではすぐに英語が出てこなかったら交流がスムーズにいかないのではないかと心配だったが、相手とつながると、私も相手も一生懸命に話して会話がどんどん弾んでいった。もっと話していたいと思うほど楽しい時間になった。」という感想が見られた。オンライン交流後は、それぞれ個別にSNSを利用して交流を続けている。自分の気持ちを伝えるためには、言葉だけではなく相手を思う工夫が大切だということを実感させることができた。また、お互いの学校生活の様子を紹介したビデオを送りあった。実際に訪問することは叶わなかったが、生徒にとっては異文化を理解する態度を身に付ける機会となった。

ペンパルとオンラインで対面する生徒

成　果

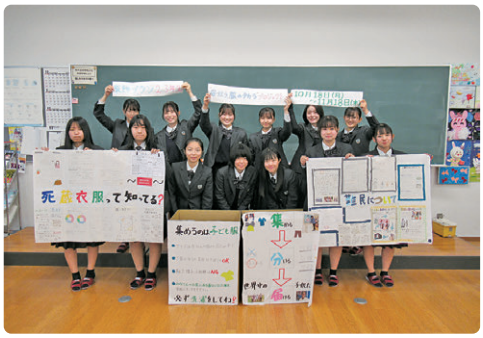
オンライン交流活動を通して、交流の楽しさや自分の思いが伝わった時の喜びを感じることができた。異文化理解への興味関心が高まったことに加え、もっと相手に自分自身のことや日本について英語で伝えたいという学習意欲を高めることができた。生徒が自らの英語力の伸びを実感したようだ。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう | 2 飢餓をゼロに | 3 すべての人に健康と福祉を | 4 質の高い教育をみんなに | 5 ジェンダー平等を実現しよう | 6 安全な水とトイレを世界中に | 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「総合学科の特色を生かした地域貢献活動」

ねらい：「まちづくり」事業を通して、生徒を未来の地域社会を担う人材へと育てる。



難民について学ぶ服飾プラン生徒

総合学科の特色を生かし、科目選択プランでの実践的な学びを地域の活動に生かしている。商学連携として、桜町本通り商店街のフラッグ（のぼり）と店舗バナー（宣伝用の旗）の作成にビジネスプランと美術プラン生徒が取り組んだ。生徒は、まず商店街に出掛け、直接商店主と打ち合わせを行った。準備したバナーの図案が却下されることもあり、完成までに何度も確認するなどできるだけ商店主の意向を取り入れながら制作した。また、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とユニクロ・GUを展開する㈱ファーストリテイリングが行っている小・中・高校生参加型の学習プログラム「届けよう、服のチカラ」プロジェクトに、服飾プラン生徒が参加した。生徒は衣服の機能と難民の状況について学び、着なくなった子供服の回収を校内にて行った。放送で全校生徒に協力を呼びかけ、集まった子供服311着は、㈱ファーストリテイリングを通じて難民などの服を必要とする人々に届けられる予定である。産学連携としては、調理・栄養プラン生徒が地域活性化の一環として、「ジビエ普及啓発振興事業」企画に参加し、鹿肉を使ったレシピの開発に取り組んだ。生徒は獣害の現状や地域の取組について自分たちで調査してまとめ、また鹿肉を使ったレシピの考案を進めた。ジビエについての研究発表がとよたエコフルタウン内のレストラン「ほがらか」で行われ、生徒が開発したレシピ「鹿ミンチのアボガドとトマトカレー」がレストランで提供されて、訪れたお客様に味わっていただくことができた。道の駅「どんぐりの里いなぶ」との地産地消を推進する新商品の開発では、生徒が開発した「ジビエパンエピ」、「ジビエソースカツパン」が採用され、道の駅「どんぐりの里いなぶ」にて販売された。さらに消費者目線に立った商品開発の知識・技能を学ぶことを目的として始まったトヨタ生活協同組合（メグリア）との「高校生の作るお弁当」「高校生の作る恵方巻」企画に取り組み、生徒の作品が販売されることとなった。その他の地域連携として、無門福祉会が開催している地域交流の催しである「むもん市」に福祉・健康プラン生徒が参加し、スタッフや障害のある方たちと一緒に、農業体験や飲み物販売を行った。日頃の授業の中で福祉について学んでいる福祉・健康プランの生徒たちも、直接交流し体験することで多くのことを学ぶ機会とすることができた。

開発したジビエ商品を販売する生徒

成 果

生徒が地域と人、人と人とが結びつくことの意義や、自分たちもその地域の一員であることを実感することができた。コミュニケーション能力や企画力、社会参画のスキルを身に付けるとともに、達成感を味わった。日頃の学習が社会貢献につながると実感できたことで、更なる学びへの意欲につながっている。

おわりに

SDGs（持続可能な開発目標）の視点を取り入れ、「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」をはじめ、各教科において多様なテーマで生徒が自ら主体的に考える授業を行っている。今年度の２学年「総合的な探究の時間」では、多くの生徒が、環境や食品ロスといった世界で取り組むべき社会問題について関心を持っており、自ら問いを設定し、多角的に考え、課題の解決策を探究した。これからの持続可能な社会の担い手として、生徒の主体性を育んでいきたい。

環境 | **国際理解** | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

名古屋市立北高等学校

北高

創　立：1963年
住　所：〒462-0008 名古屋市北区如来町50番地
連絡先：TEL 052-901-0338　FAX 052-902-1596
学級数：21　生徒数：826人
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kita-h/

SDGsアクションを起こせる人材の育成

はじめに

本校は2015年度より国際理解コースを開設し、NPOへの活動協力を通して、ESDに積極的に取り組んできた。2018年にユネスコスクールとなり、その活動をホールスクールの取組にしていくために、ユネスコ委員会を立ち上げた。自主的な活動を継続させるために、生徒自身の当事者意識を高める活動から始め、生徒による生徒のための企画を支援している。SDGsの啓発活動や活動実践を通して、生徒たちがグローバルイシューに自分事として自発的に取り組める活動を支援している。

実践内容❶「ユネスコスクールとしての活動」

ねらい：生徒がSDGs問題を身近に感じ、問題解決に向けて自ら問いかける力の育成。

本年は1年生および国際理解コース2・3年生の生徒を対象に、ユネスコ講演会を行った。新しい技術でリサイクル活動を実践している企業の方からペットボトルや古着を新しい服へリサイクルしたり、映画で使われた、ごみを燃料とするデロリアン（自動車）を動かしたりする活動をご紹介いただいた。こういった活動を通して循環型社会を作る上で必要な考え方を学んだ。廃棄後の製品が、新品となって手元に戻ってくるようなシステムが一般的になれば、新しい地下資源を採掘するための争いがなくなり地上資源のみで経済活動ができるようになることを学んだ。また、そのための技術開発の重要性も実感できる内容であった。

循環型社会をめざして

成果

日常的にSDGsという言葉を耳にしていても、なかなか自分の生活と結びつけて考えることができなかったが、小さなアクションが地球規模の成果を生み出す第一歩となることを学び、自分たちにできることは何かを考えることができるようになった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「ユネスコ委員会の活動」

ねらい：生徒が自ら問題を見つけ、その問題への取組を自ら発案し、実践していく力の育成。

アイシティecoプロジェクト

ユネスコ委員会の特徴は、他の委員会と異なり、委員が各クラスから選出された1名と有志参加者から成り立っているところである。多くのプロジェクトを実践しているが、その中心となるメンバーの多くがSDGsに興味を持って集まった生徒たちである。

今年度は、リサイクルについての講演会を通して学んだあと、地域の環境事業所への聞き取りなどを行い、ごみのリサイクルについて知識を深めて、成果物を作成している。

また、昨年度から作成していた北高版SDGsカルタを完成させた。今年度は、本校の漫画研究同好会に依頼し絵札を作成してもらった。完成した絵札・読み札をセットにし、近隣の小・中学校に寄贈した。

年度末には校内でSDGs啓発活動の一環として関連映画を上映し、その後、フェアトレードチョコレート販売を行った。その収益金をNPOアイキャンに寄付し、フィリピンの路上で生活している子供たちを支援する活動に利用してもらった。

さらに、本年の新しい取組として、アイシティecoプロジェクトに参加した。全校生徒の協力のもと、使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収し、寄付をした。

成 果　SDGsを学んでも、まだまだ全ての生徒にとって自分事にならず、明らかに主体性という壁があったが、最初は真意が分からず参加していた委員も、徐々に受け身から脱し、必要性を感じ、小さな行動を起こすことができた。

実践内容❸
「ユネスコスクール交流会に参加して」

ねらい：ユネスコスクール間の交流を深め、お互いのプロジェクトから相互に学ぶ。

ユネスコスクール交流会

ユネスコスクール交流会に参加し本校のユネスコスクールとしての取組を報告した。実際に会場で発表するということで、ユネスコ委員会で発表者を募り、有志の生徒が、ユネスコ委員会の設立と、昨年度から今年度までに実践した活動について紹介した。生徒はパワーポイントを用いたスライドの作成や、プレゼンテーションの練習にも余念がなく、発表は成功を収めることができた。当日、他校の生徒とのワークショップを通して交流の輪を広げ、新しい学びを得ることができた。

成 果　他校生徒との交流会を通して普段とは違う気付きや学びを得ることができた。大勢の前で発表をすることで問題意識を共有し、自信を持つことにつながり、大きな成長へと結びつけることができた。

おわりに

委員会を発足したことで、自主的な実践活動が増えてきた。啓発のための国際理解講演会と共にユネスコ書き損じはがき回収や、NPO支援の古本回収といった実践、多団体の活動への参加だけでなく、本校独自の活動となるフェアトレード推進活動も、定例行事として定着しつつある。本校のモットーは「楽しくサステナブルな活動」である。SDGsは、高校時代だけで終わる活動ではなく、2030年で終わるわけでもない。楽しさを意義ある活動へ繋ぎ、生涯を通じて世界の問題に目を向けられる視野を、今後も生徒に育んでいきたい。

環　境 | 国際理解
地域文化 | 気候変動
生物多様性 | 防　災
エネルギー | その他

名古屋国際中学校・高等学校

創　立：2003年（中高一貫コース）
住　所：〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町1-16
連絡先：TEL 052-858-2200　FAX 052-853-5155
学級数：22　生徒数：700人
H　P：https://www.nihs.ed.jp

学校・企業・地域交流とサステイナブルな活動

はじめに

本校では、サステイナブルなまちづくりをテーマし、ローカルとグローバルの両視点で様々な社会課題解決に向けた実践をしている。特に、ユネスコスクールなどを含めた他の中学校・高等学校や自治体、企業やNPO、国際機関、さらに県外や海外にまでエリアを広げ、様々な交流を重ねている。生徒たちはこうした交流を重ねることで授業では得られない多様な文化・伝統、人間性や生き方、地域性などを学んでいる。SDGs未来倶楽部Sus-Teen!や国際コンテストクラブなど多様な部活動での活動も創出している。

実践内容❶
「ユースの森人－八事興正寺公園の森林間伐－」

ねらい：森の間伐作業の実施による残された自然環境の大切さと地域の魅力の発見を目指す。

昭和区には八事興正寺公園がある。その公園には市街地に残された森がある。その森は、市民団体八事里山づくりの会が長年保全活動を行っている。その森の保全活動もメンバーの高齢化が進んでいた。そこで、保全活動を若者へ広げたいという昭和区役所と八事里山づくりの会が名古屋国際中学校と連携し、新たに森の間伐作業をスタートさせた。始めは、森の観察を専門の方に講話をしていただき、森の役割や歴史、木々の種類、ロープと杭を使った森林調査のやり方を学ぶ。間伐作業では、森に必要でない木や倒木の撤去を行う。ノコギリを使って、生きている木を切ったことがない生徒も多くおり、どこを切って良いのか、どう切ればよいのかを試行錯誤しながら実施した。第一回目の活動を終えた後、その活動を生徒を中心とした継続実施することが決まった。

森の間伐作業の様子

こうした経緯から市民団体八事里山づくりの会の中に、「ユースの森人」という部門を立ち上げた。若者が作る森づくりをコンセプトに月一回の八事興正寺公園内の間伐作業や他の地域森に関する活動を行うことになった。岐阜県御嵩町での本格的な間伐作業体験にも参加し、大きな木が引き倒し、枝打ち、運搬を体験した。

成　果

身近な地域に豊かな森があることを知り、その保全の必要性を認識することができた。そして、木々についての知識や林業、NPOの活動などに触れることにより自らの探究心の芽生えにもなった。「ユースの森人」を立ち上げることで、森を守る責任感も生まれた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう | 2 飢餓をゼロに | 3 すべての人に健康と福祉を | 4 質の高い教育をみんなに | 5 ジェンダー平等を実現しよう | 6 安全な水とトイレを世界中に | 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「アップサイクル商品の開発」

ねらい：廃棄するものから新たな商品を生み出し、「ゴミは資源である」という気付きを生み出す。

アップサイクル商品

地元企業と生徒が連携し、廃棄されるものに中学・高校生のアイディアを加え、アップサイクルの商品開発をした。えびとうどんから「サステイナブルえびせんべい」、おちょことろうそくから「サステイナブルおちょんドル」、ペットボトルと漬物の残り汁から「サステイナブルペトックス」である。商品開発中、「企業にしかできないこと」や「中学・高校生だからできること」などの双方の利点や特色が明らかになった。お互いのやれることを分担し、協力することの必要性を商品開発の過程で企業も学校も学んだ。また、新聞やテレビなどから取材依頼が多数あり、その対応に関しても「どうすれば話せばいいのか」という対話力も自らの活動に必要であると生徒たちは感じていた。

成 果　企業が抱える環境に関する課題と努力を知ることで教科書の内容にリアリティを付加することになった。また、課題解決のための生徒自身のアイディアが体現されることによる純粋な喜びが生まれた。

実践内容❸

「学校・地域を越えた学校間のサステイナブル交流」

ねらい：愛知県内外の中・高校生と交流し、学校・地域の多様性を感じることで自らの実践を飛躍させる。

オンラインによる交流の様子

愛知県内外のユネスコスクールやその他の学校では、それぞれの創意工夫で興味深い活動がされている。また、これからユネスコスクールの加盟を目指す学校やこうした活動をしたいという学校も多くある。本校では部活動を中心に、そうした他校と交流を積極的に重ねた。国際的な活動をしている学校との交流では、テーマは「英語を利用したボランティア活動について」、鹿児島の学校との交流では、「桜島の灰って何かに利用できないの?」という本校の問いかけから、鹿児島の生徒たちと本校生徒が共同して高校生なりの灰の活用を考える機会を得た。遠方の学校とは、ICT機器を活用したオンラインで交流をしている。

成 果　他校との交流することにより、日々の実践の振り返りとさらなるアイディアの創出につながった。地域差や学校の伝統差などの多様な要素がそれを生み出しており、生徒自身もそうした「差」を楽しんでいるように感じる。

おわりに

今までの活動は、生徒や教員がやりたいことを「とりあえずやってみよう!」という気持ちでチャレンジした。ただ、そうした活動は、表面的・単発的になりがちである。今後は、こうした活動が自らの生き方とどのようにつながっているか、また、地域社会にどのような影響を与えているのかを統計的な見地で記録したい。また、それぞれの活動を繋げて、持続可能な活動にまで昇華させることにもチャレンジしていきたい。こうした課題をさらに新しい交流を通じて一つずつ生徒と笑いながら解決できるように活動をしていきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

中部大学第一高等学校

創　立：1938年
住　所：〒470-0101 日進市三本木町細廻間425
連絡先：TEL 0561-73-8111　FAX 0561-73-8031
学級数：38　生徒数：1,372人
H　P：https://www.chubu-ichi.ed.jp

ESDから見据える地域と世界

はじめに

本校の建学の精神は「不言実行、あてになる人間」であり、ESDを通して未来を見据える見識と実行力を兼ね備えた人材を育成することを目標としている。SDGsを教育課程に位置づけており、総合的な探究の時間を中心に多様な探究活動を行っている。また、ESD研修や地域連携プロジェクト、ESD大賞研究活動発表会などを実施することで教育機会の充実を図っている。

実践内容❶「ESD・SDGs探究とESD研究活動大賞発表会」

ねらい：思考力・表現力・判断力などの力を養いながら、将来に向けて個々の可能性を広げる。

総合的な探究の時間では、普通科特進コース・一貫コースを中心にESD・SDGs探究プロジェクトを実施している。本活動では、生徒各自が「興味・関心」「将来研究したい学問」「SDGs」の３つの観点を包括的に捉えながら、ソロプロジェクトとして探究テーマを設定する。テーマ設定は、「教科やSDGsとの関係」「社会的意義」「フィールドワーク及びデータ分析の手法」「仮定・推測される成果」などの観点と個人の興味・関心を踏まえて構成し、iPadを利用し研究計画の作成やフィールドワーク及びデータ分析、プレゼンテーションを行いながらプロジェクトを進めている。

ESD研究活動大賞発表会は各団体・個人が発表を行い、活動を共有する場として設定されている。その中で得られるフィードバックは探究の質をさらに向上させている。近年では、探究テーマが多様化し独創性や創造性の向上がうかがえる。さらに、iPadを利用したプレゼンテーションやポスター作成、発表での工夫を通して表現力が高まっている。また、一部の探究テーマはクラスや部活動などでの大きな活動につながっている。

ESD研究活動大賞発表会

ESD研究活動大賞発表会　発表テーマ（2022年１月実施）

「地域デザインから創造する世界」
「日本製品不買運動にみる日韓関係悪化に関する考察～テキストマイニングを活用したデータ分析」
「ポイ捨てを減らすためには」
「本校におけるバイオマスの可能性～修学旅行での学びと今後の展望」
「アロマ環境デザイン―COOL CHOICEと持続可能なライフスタイル―」　など

成　果

探究テーマが多様化してきており、独創性や創造性、研究力の高まりがうかがえる。また、プレゼンテーションやレポート作成を通して表現力が大きく向上している。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「ESD部」

ねらい：地域一体型の環境政策を目指して教育的視点からの取組を展開する。

本校ESD部は2015年より日進市環境課と連携しながら、COOL CHOICEプロジェクトを促進してきた。本活動では高校生が小学生向け環境教育ワークショップを行い、CO_2削減へ向けた環境配慮型アクションと持続可能なライフスタイルを考える双方向的な場となっている。今年度は、「アロマ・エコ・グリーン」をテーマに自然豊かな日進市の自然に目を向け、「香り」の観点から植物の力を生活に取り入れるワークショップを考案しており、「香育」の視点を小学生ワークショップの計画に取り入れている。

身近なアロマ環境を考える

成 果　これまでの活動を踏まえ、新たな着眼点である「香り」の視点から活動を展開することで、今後の地域連携の可能性が広がりつつある。

実践内容❸
「異文化理解へのアプローチ（フェアトレードと「届けよう、服のチカラ」プロジェクト）」

ねらい：多角的な切り口から世界的な視野を涵養する。

本校普通科特進コースでは長年にわたりフェアトレード活動に取り組んでおり、名古屋のフェアトレードショップと連携して商品の委託販売を行っている。商品を扱う中で文化や社会の多様性を学んでいる。また、商品の売り上げ向上のため、データ分析などを用いることで経営的な手法を考察している。

本校普通科一貫コースでは、2018年度より「届けよう、服のチカラ」プロジェクトに参加している。4年目となる本活動では、ユニクロの社員による出張授業を通して、身近にある企業の取組とSDGsなどのグローバルな社会問題との関連を考える機会となっている。

フェアトレード商品

成 果　国際支援活動をより効果的に行うために経営的な視点を取り入れることで、国際的な教養に加えてデータ分析力やマーケティング力が高まってきている。

おわりに

ESD探究及びそこから展開される発展的な研究活動は生徒個々の可能性や本校教育活動、地域連携の新しい地平を開拓してきている。今後は、フィールドワーク、ESD活動評価のモデル作成などの教育開発に関わる事柄や高大連携などの学外連携の発展に向けた取組の充実を図り、学びの多様性に対応できる環境整備を継続していく。特に、初めての実施となるESD国内研修をもとに今後のESD研修のあり方を模索する。また、探究活動成果のライブラリー化を行い、探究活動の発展へとつなげる。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、ESD活動やSDGsに関心のある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学の、児童、生徒、学生、教職員、行政、団体が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から高等学校までの児童生徒や教職員等約130名が参加申込をし、活動発表や意見交換を行いました。また、動画配信視聴回数も最大323回を数えました。YouTubeでも限定配信しました。

日 時　2021年10月16日（土）13時から16時

会 場　ウィルあいち　3F大会議室　ほか
※あわせて、Web会議システム「Zoom」を利用しオンラインでも開催しました。

主 催　愛知県教育委員会

後 援　日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

ポスターセッションムービー

2校ずつ事前に収録した交流セッションの様子を動画配信しました。

	発表内容	
①	**豊橋市立下条小学校** 「下条の実りに感謝♥」 自然豊かな「ふるさと下条」。食農を中心に地域の方々との触れ合いを通した活動の報告	**中部大学第一高等学校** 「地域デザインから創造する世界」 SDGsの観点から展開した多様なプロジェクトを日進市一帯の地域デザインとしてまとめた報告
②	**豊橋市立東部中学校** 「校区と連携した、持続可能な取組を目ざして」 小中学校と地域が一体となって、自分たちの校区をよりよくするために考え、実践した活動を報告	**名古屋大学教育学部附属高等学校** 「コロナ禍でもできる【高校生国際会議】」 「School Education and Covid 19」というテーマで国際会議をオンラインで実施した報告

参加申込校（順不同）

名古屋市立桃山小学校	豊橋市立東部中学校	愛知県立新川高等学校
小牧市立篠岡小学校	豊橋市立南稜中学校	愛知県立瑞陵高等学校
豊橋市立下条小学校	名古屋国際高等学校	愛知県立津島東高等学校
豊橋市立大清水小学校	名古屋市立北高等学校	愛知県立桃陵高等学校
豊橋市立鷹丘小学校	名古屋市立名東高等学校	愛知県立半田高等学校
名古屋市立平田中学校	愛知県立愛知商業高等学校	愛知県立豊田東高等学校
安城市立安城西中学校	愛知県立一宮商業高等学校	愛知県立三谷水産高等学校
刈谷市立刈谷東中学校	愛知県立岡崎商業高等学校	中部大学第一高等学校
新城市立作手中学校	愛知県立犬山高等学校	名古屋大学教育学部附属高等学校

交流会プログラム

12:45	**受付開始** ～会場移動	
会場移動・休憩		
13:00	**開会行事**（主催者挨拶） 愛知県教育委員会 教育管理監 稲垣 宏恭	
会場移動		
13:10～14:20	**分科会**（ユネスコスクール活動発表）	
	大会議室	**名古屋国際中学校・高等学校** 「SDGsで地域と世界を紡ぐ」 地域及び海外の方々とのグローカルな交流と企業・自治体との協働活動に関する報告
		豊橋市立鷹丘小学校 zoom 「みんな笑顔に、大好き鷹丘 ～共に生きる～」 ふるさと鷹丘について考える「たかおか学習」。校区の自然や人との共生を追究した活動の記録
		名古屋市立北高等学校 「北高ユネスコ委員会の取組」 北高ユネスコ委員会によるSDGsの取組報告
		ディスカッション ファシリテーター：名古屋市立大学 准教授 曽我 幸代 氏
	会議室４	**豊橋市立南稜中学校** 「梅田川を未来へつなぐ ―持続可能な社会の実現にむけて―」 梅田川の豊かな生態系を守り、未来につなげるために取り組んだ様々な活動についての報告
		愛知県立愛知商業高等学校 「ミツバチで地域活性化 ～持続可能なまちづくりを目指して～」 校舎屋上で養蜂活動を行い、ミツバチを核に地域活性化を目指す取組についての報告
		愛知県立豊田東高等学校 「探究活動【環境問題と昆虫食】」 環境問題を解決するための方法の一つとして、昆虫食を広めるためにはどうするかという研究に関する報告
		ディスカッション ファシリテーター：中部大学 准教授 古澤 礼太 氏
会場移動・休憩		
14:30～15:50	**基調講演** **「お笑い芸人から学ぶコミュニケーション術」** zoom 講師 たかまつ なな 氏（お笑いジャーナリスト）	※基調講演についても オンラインで実施いたしました。
15:50～16:00	**まとめ** 基調講演講師とファシリテーターによる本交流会のまとめ	

zoom 表示の１校はオンラインでの発表となりました。

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

小・中学生	どの学校も自分たちの周りの環境を守ったり未来につなげていくためにその場所ならではの取組を行っていて面白かった。自分の学校にも取り入れていきたい。
教　職　員	よい刺激になりました。SDGsについてもっと多くの人に伝え、考え、行動にうつしてもらえるよう様々な工夫をしていきたいと思いました。今は、「まねる」ことしかできないかなと思いますが、新しい視点をこれから探していければいいなと思いました。
教　職　員	緊張を感じさせない立派な発表でした。基調講演では、興味深い話をきけて、たいへんよかったです。相手に伝える方程について考え直すことができました。
高　校　生	普段は、新型コロナウイルスの影響もあり、交流する機会の少ない学校の活動報告を聞くことができて良かった。他の学校がどのような取組を行っているのか知るきっかけがないので、交流会を通して同じ中・高生が行っている様々な活動を知ることができ、刺激を受けた。
高　校　生	今回の交流会に参加して、様々な学校の発表を聞き、私も環境に対する意識がさらに高まり、また活動についても学ばせていただくところが多くあり、とても良い経験になりました。今後、この交流会であったことを活かせるよう、活動していきたいと思います。

ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

高　校　生	ESD活動を行う人々が、座学だけでなく、実際にアクションし活動すること。
高　校　生	今後、発信力を高め、全国に広げていくため、ユネスコスクール同士の協力が必要だと思いました。ミツバチや昆虫食と梅田川、つながりを作っていこうと思いました。
一般参加者	学校教育。学習指導要領の内容の実践。教員の指導力向上。
高　校　生	今回の交流会のように学校同士が活動を報告し合い、互いの活動に興味を持てるような場を作ること。
高　校　生	まずは、今自分たちが行っている活動をしっかりとこなし、これからも、地域・環境に貢献します。またSDGsなどについて自分が学んだら、１人だけで学ぶのではなく共有することが必要だと思います。今日のことも、親や友達に話すことで学びの場が広がると思います。
高　校　生	プレゼンだけではなく、お食事会などの形でも交流の場があると良いなと思っています。
教　職　員	子供が考えて、子供が学ぶ場をつくっていくことが、ESDにもSDGsにもつながっていくと思いましたので、SDGsの視点でスマートシティを考え、大人を巻き込んで新たな可能性を見つける授業を行っていきたいと思いました。

ポスターセッションムービー

ユネスコスクール活動発表

ディスカッションの様子

オンライン参加校を交えたディスカッション

基調講演＆まとめ（オンライン）

YouTubeでの配信の様子

ユネスコスクール活動事例集　第9集

令和4年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課
〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電　　話 052-954-6780（ダイヤルイン）
ファックス 052-954-6962